

我が祖 山田文右衛門

亀畑義彦



第十代 山田文右衛門清富

文政3年8月10日—明治16年9月12日（1820—1880）

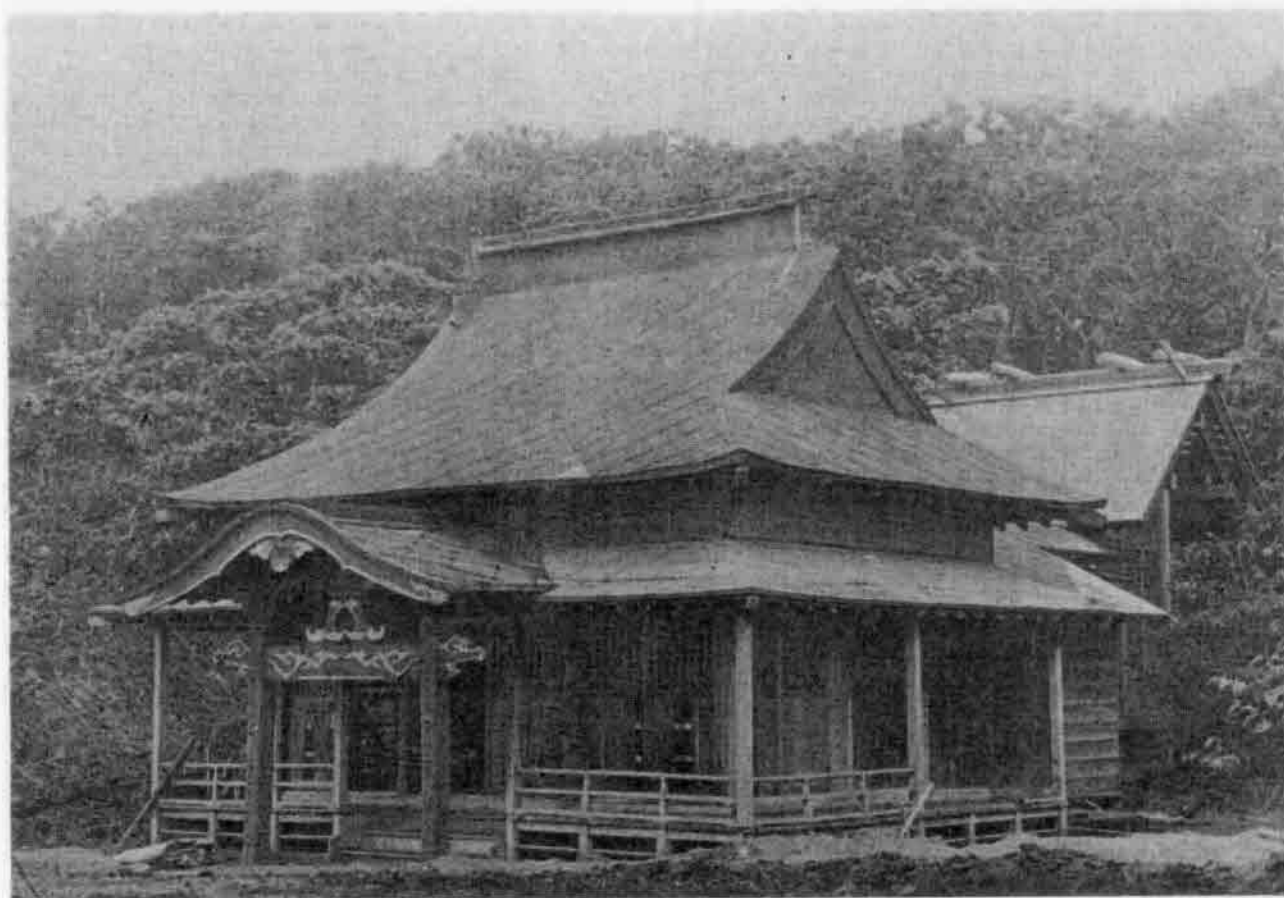
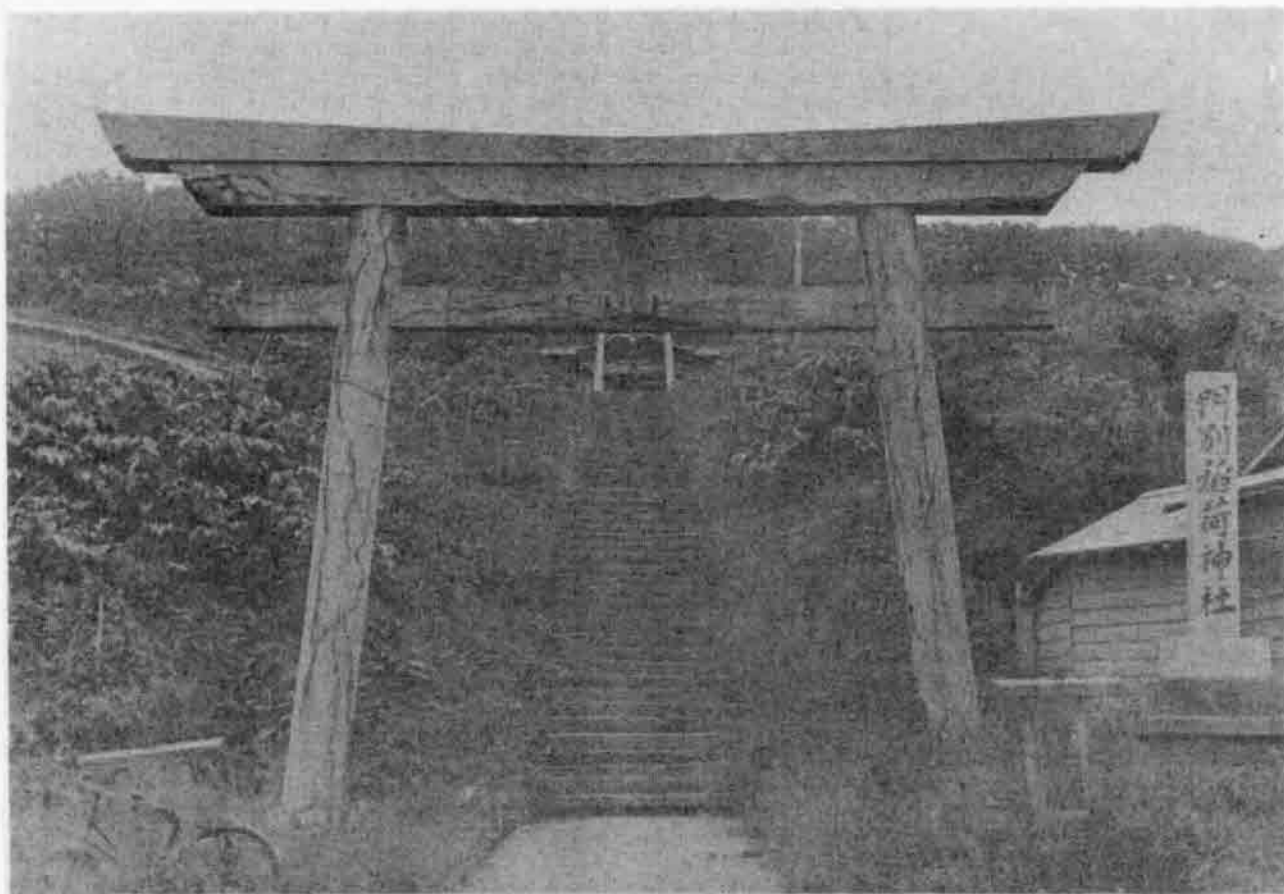
（遠藤文太郎氏 提供）



第十一代 山田清次（幼名 文治）

嘉永2年7月9日—明治31年9月8日（1849—1898）

（遠藤文太郎氏 提供）



十代 山田文右衛門清富建立 (下川写真館写す)
(昭和50年1月)

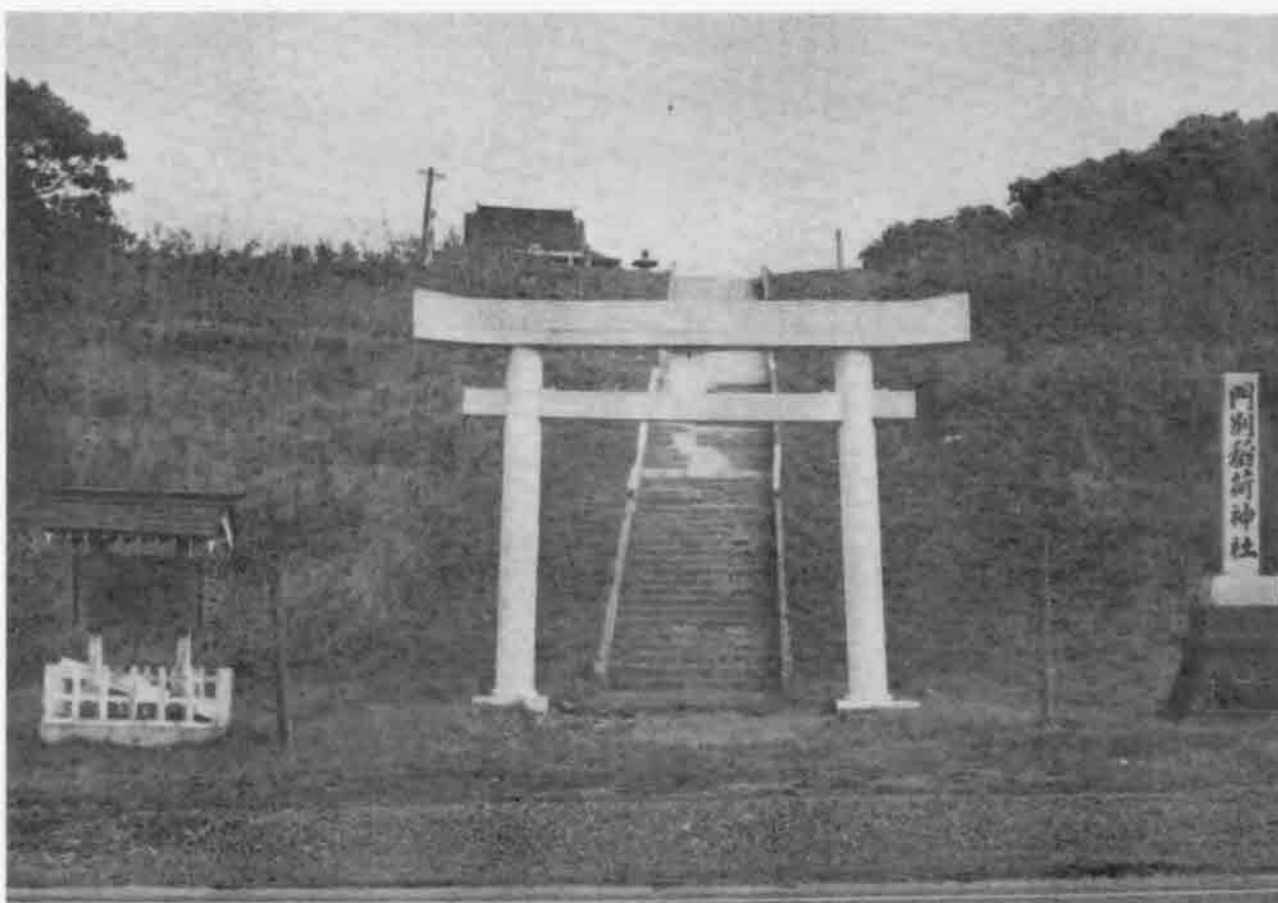


山田文右衛門と昆布投石の浜

稲荷神社の入口（下川写真店写す）

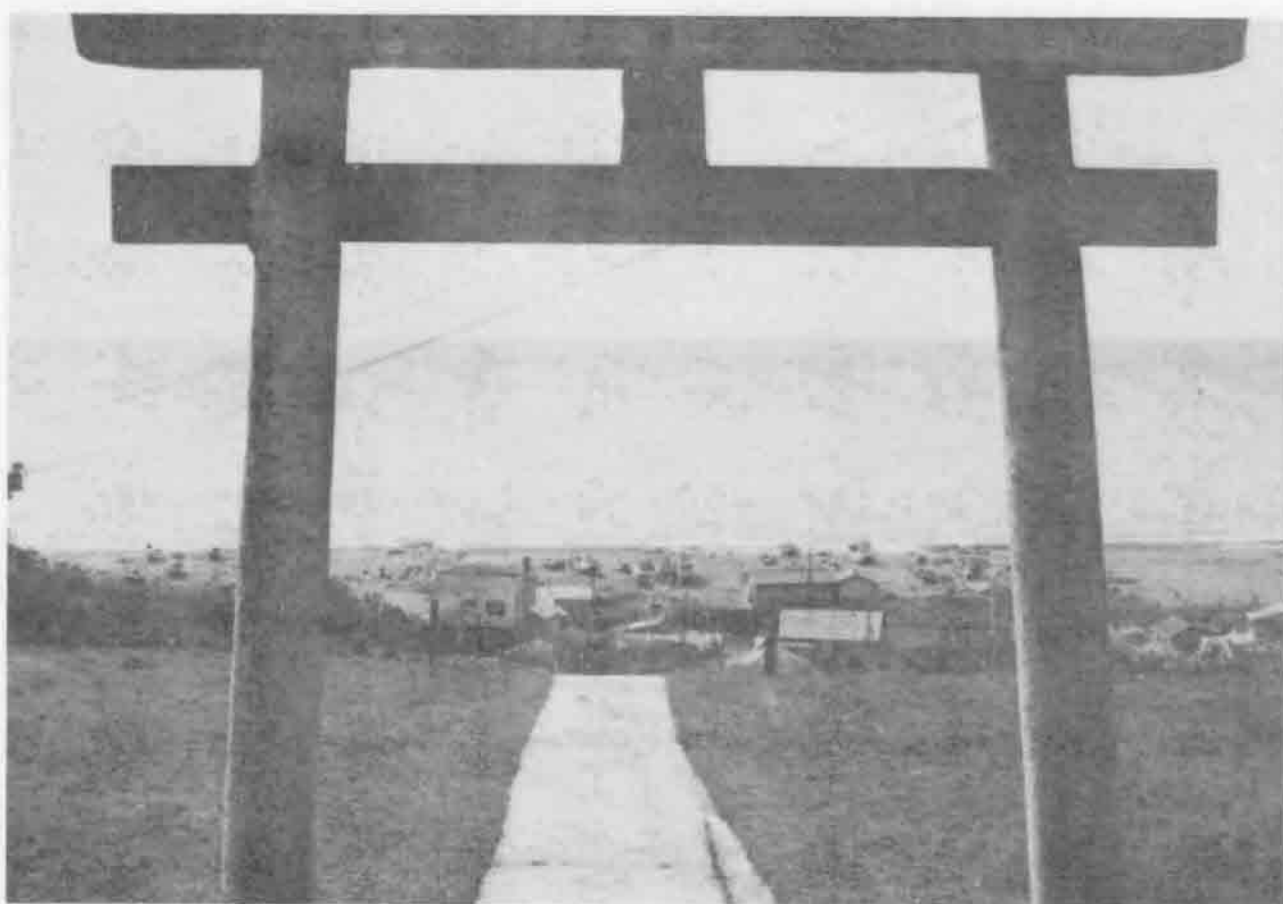


建て直されたもの（昭和44年）
第1の鳥居（亀畑写す） 昭和51年10月20日





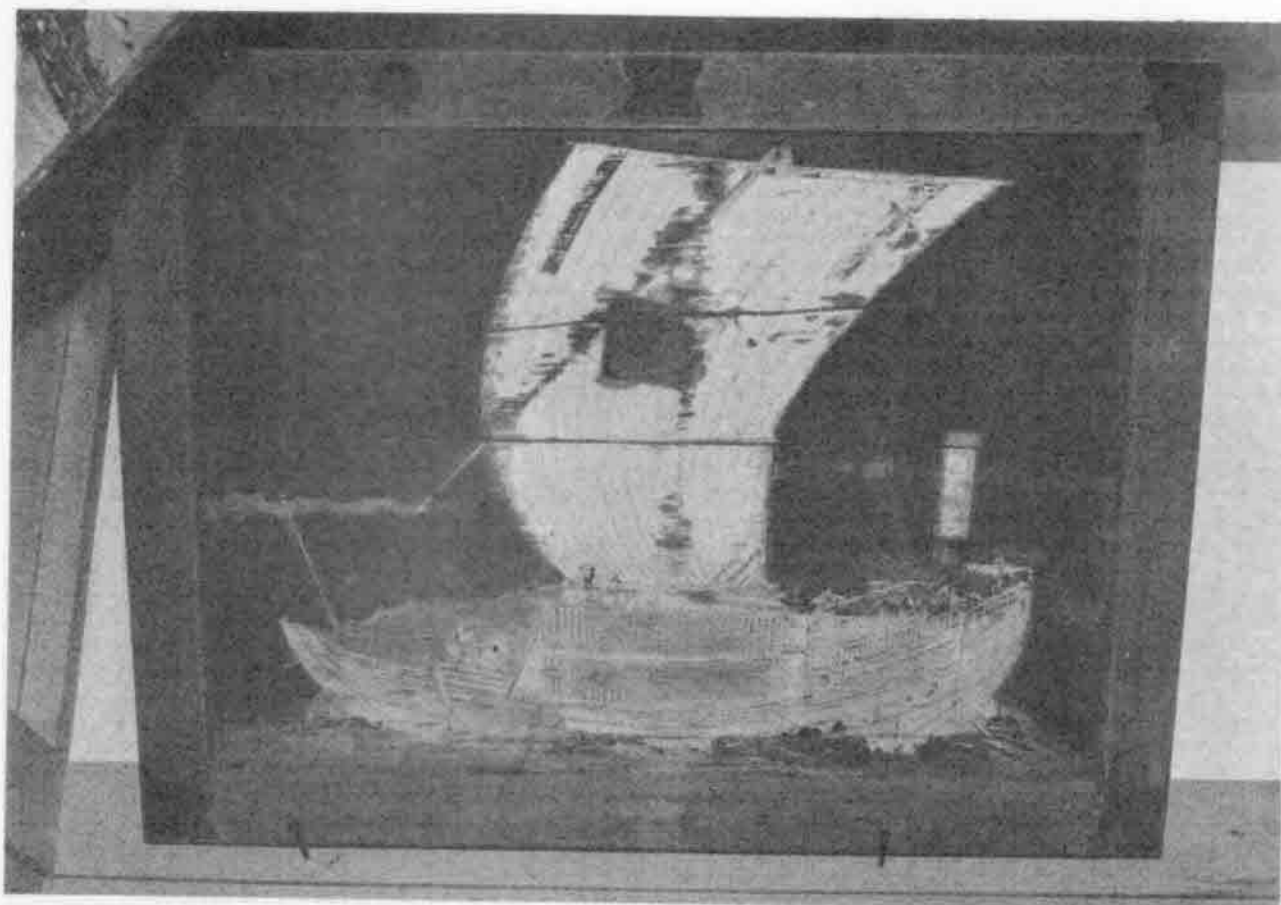
第2の鳥居（佐藤伝作氏により、昭和44年に建直されたもの
（下川写真店写す。



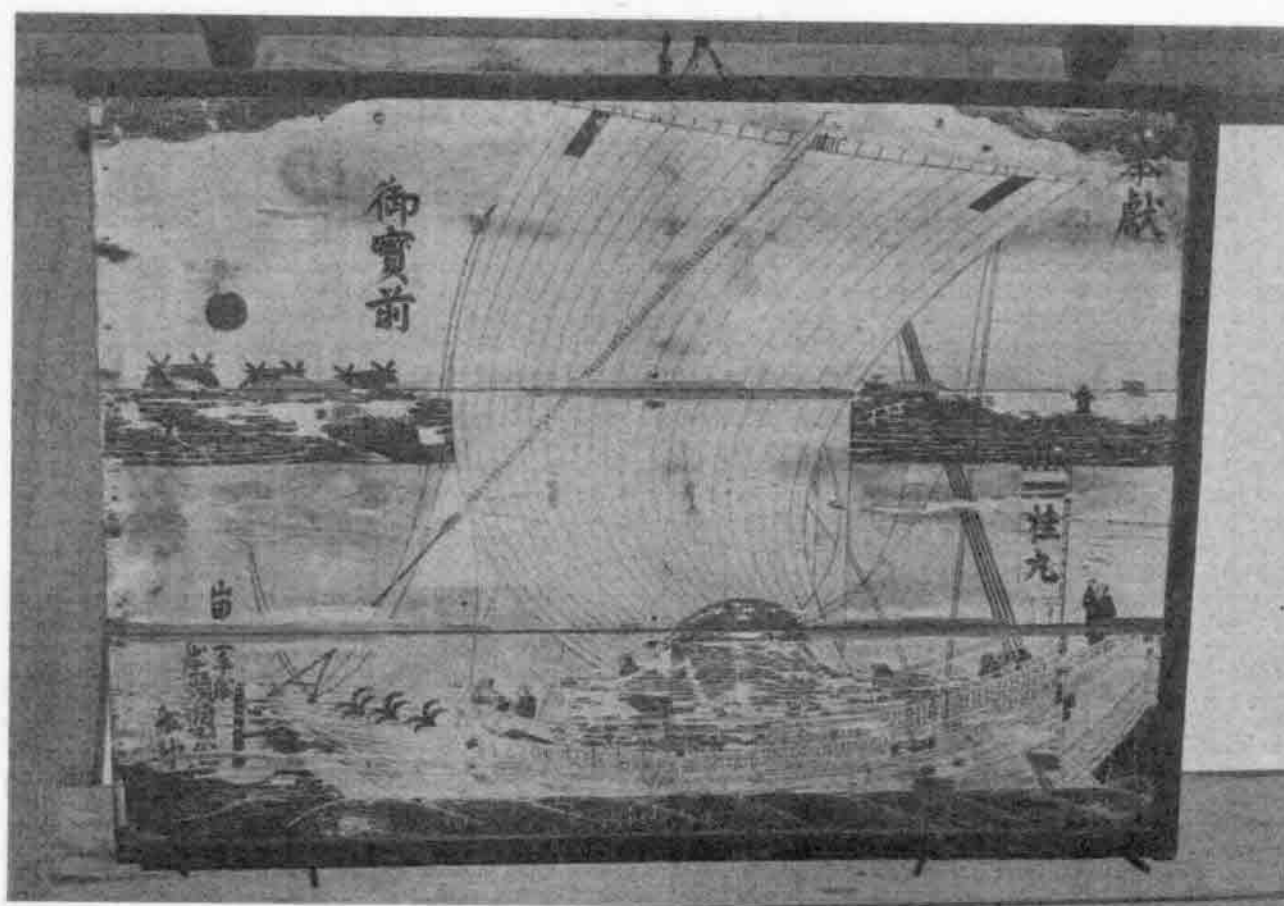
第2鳥居から、かつての山田家昆布投石の海を見る（亀畑写す）



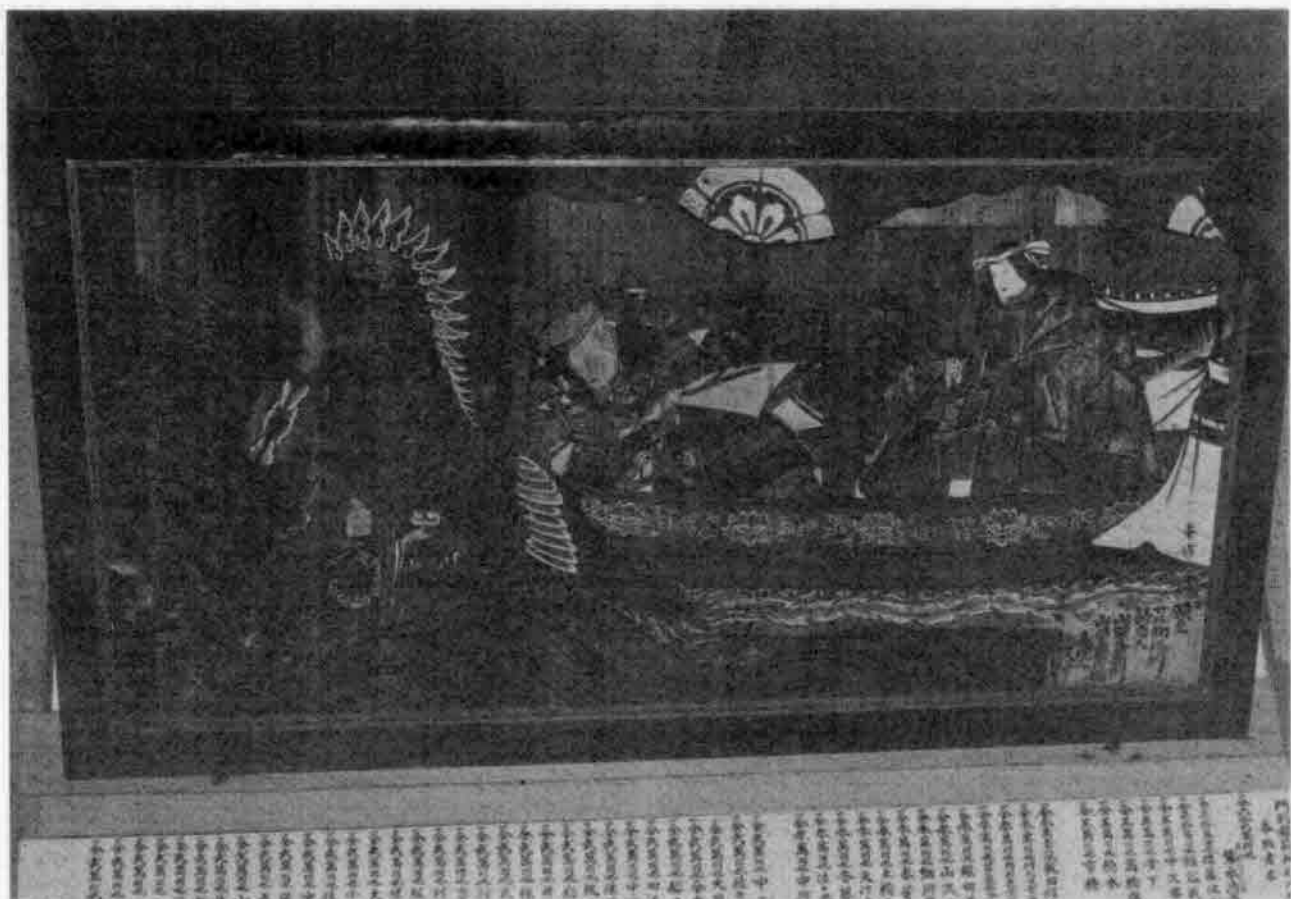
鳥居、石燈ろう、および入り口の木製のかざりは、十代文右衛門 清富の建立したものをそのまま使用している。。立っているのは著者



山田家 手船 (下川写真館写す)



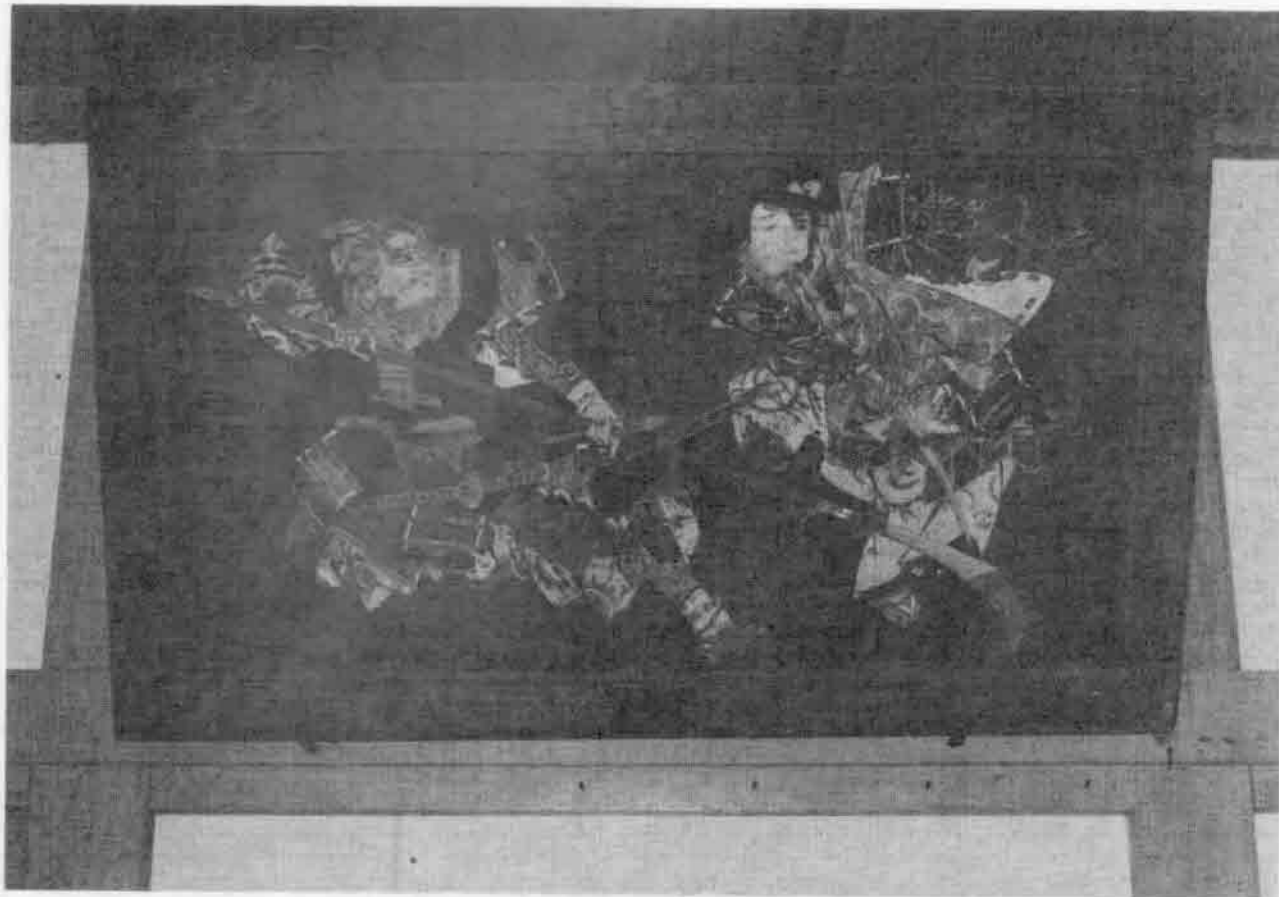
山田家 手船 (下川写真館写す)



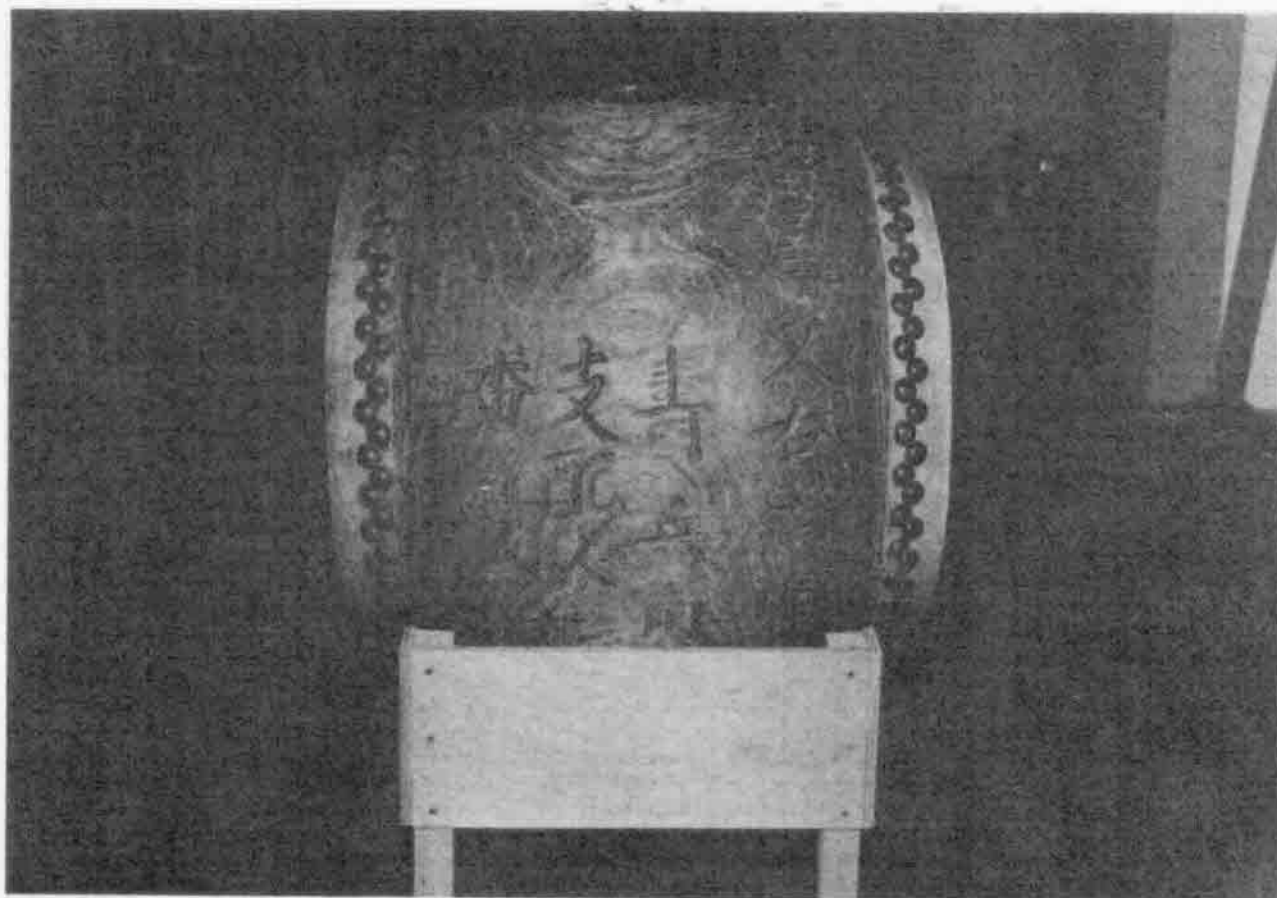
山田家奉納 (下川写真館写す)



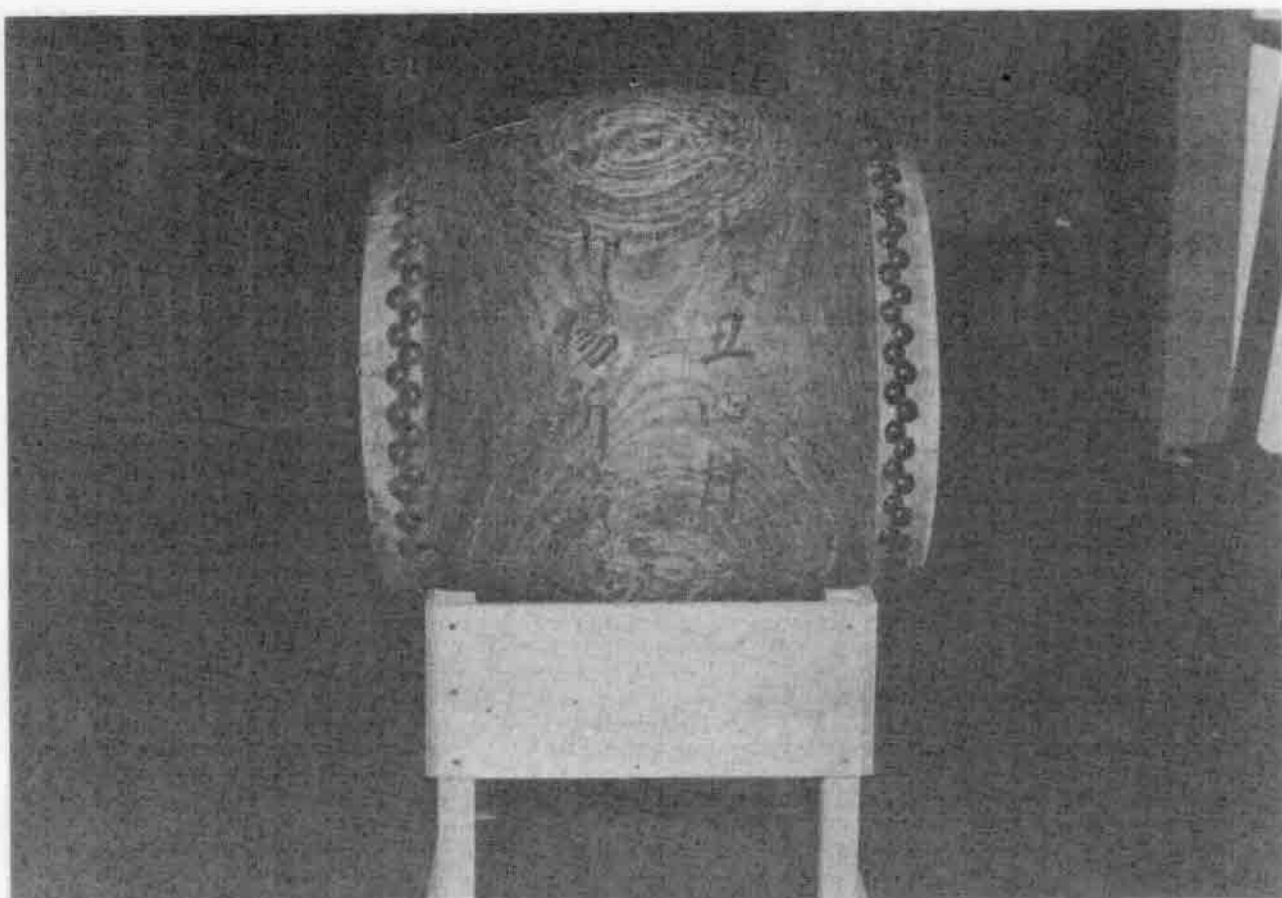
山田家奉納
大冥屋



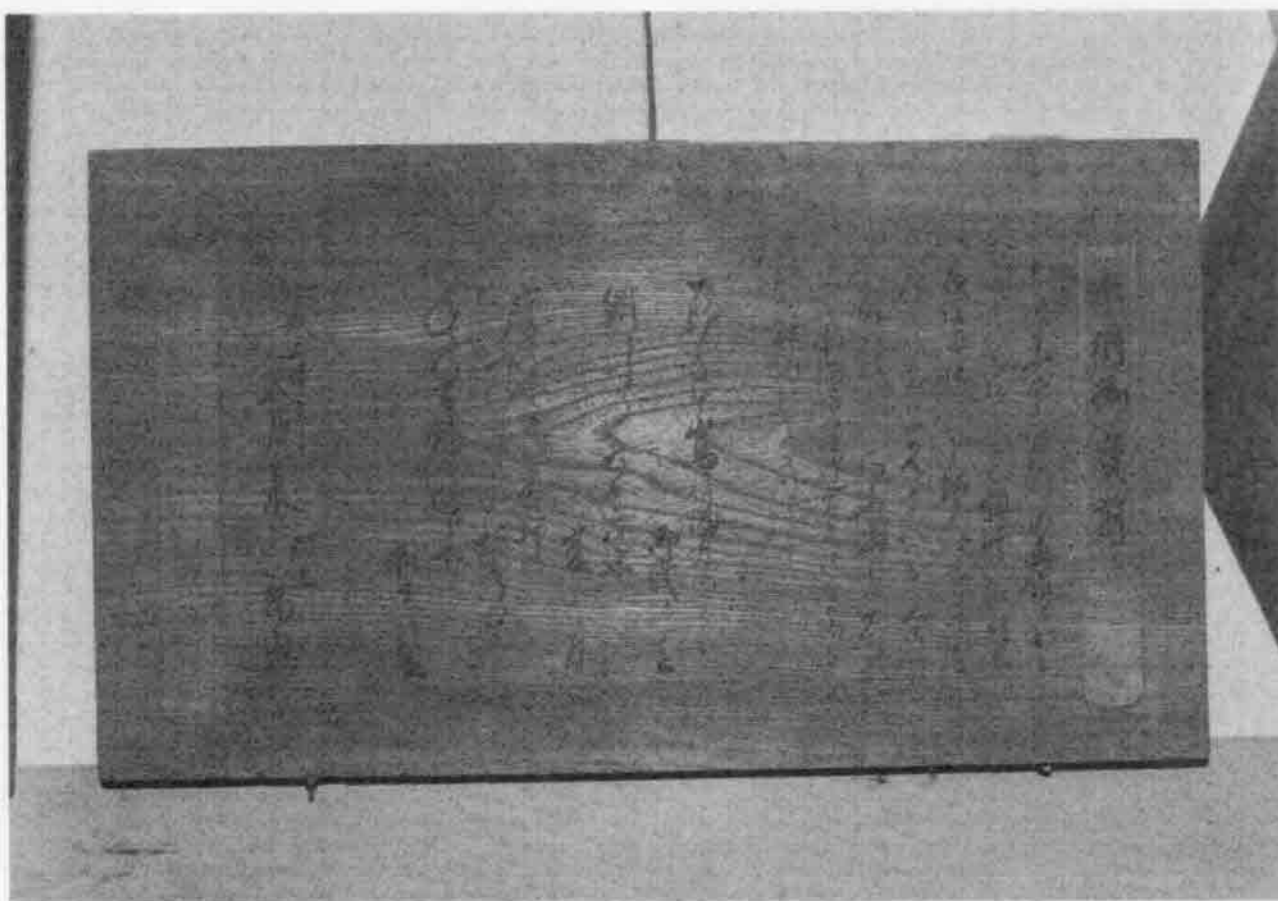
山田家奉納とされている。



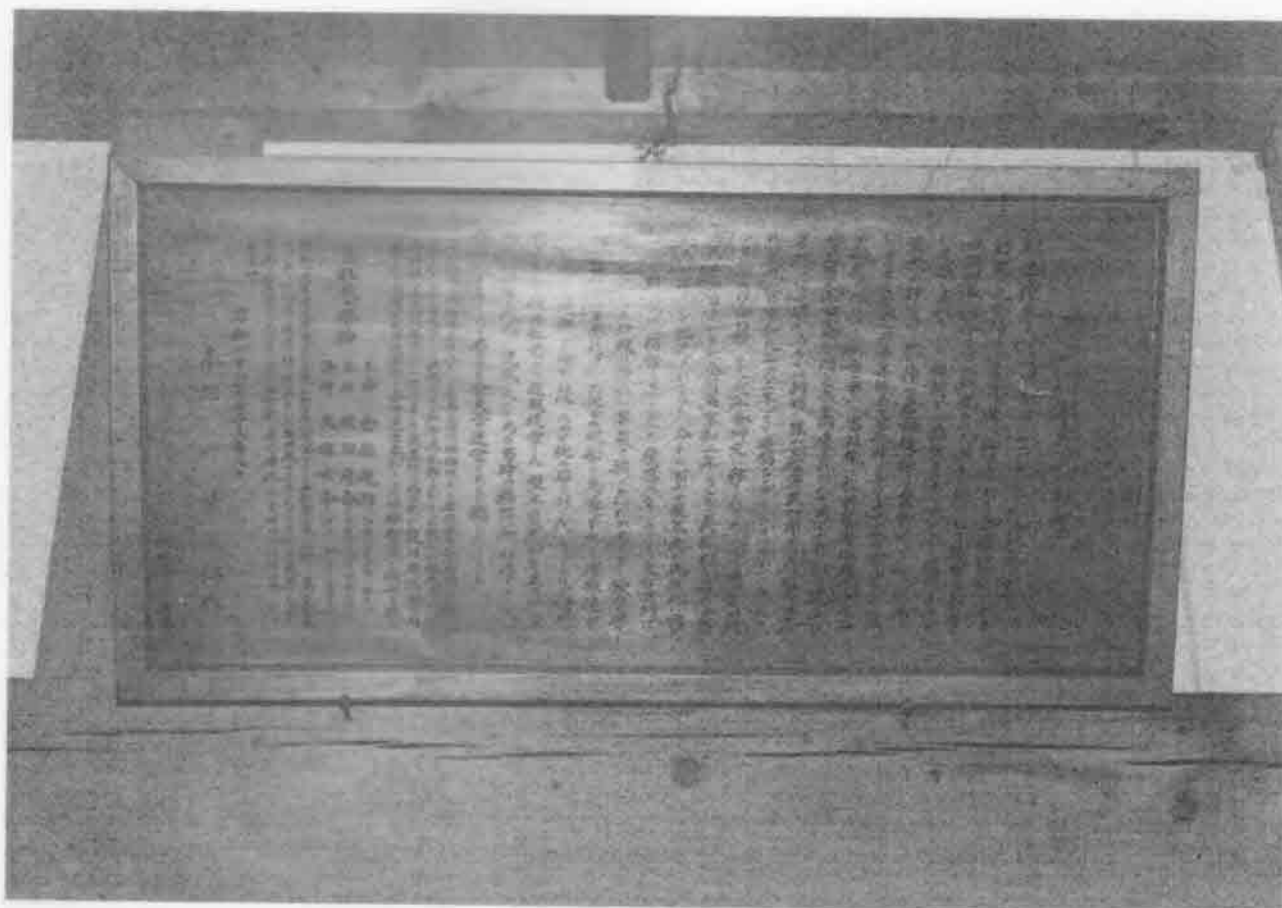
山田家奉納の太鼓。音色がすばらしい。(下川写真館写す)



(下川写真館写す)



山田家奉納（十代文右衛門自作、自筆）（下川写真館写す）

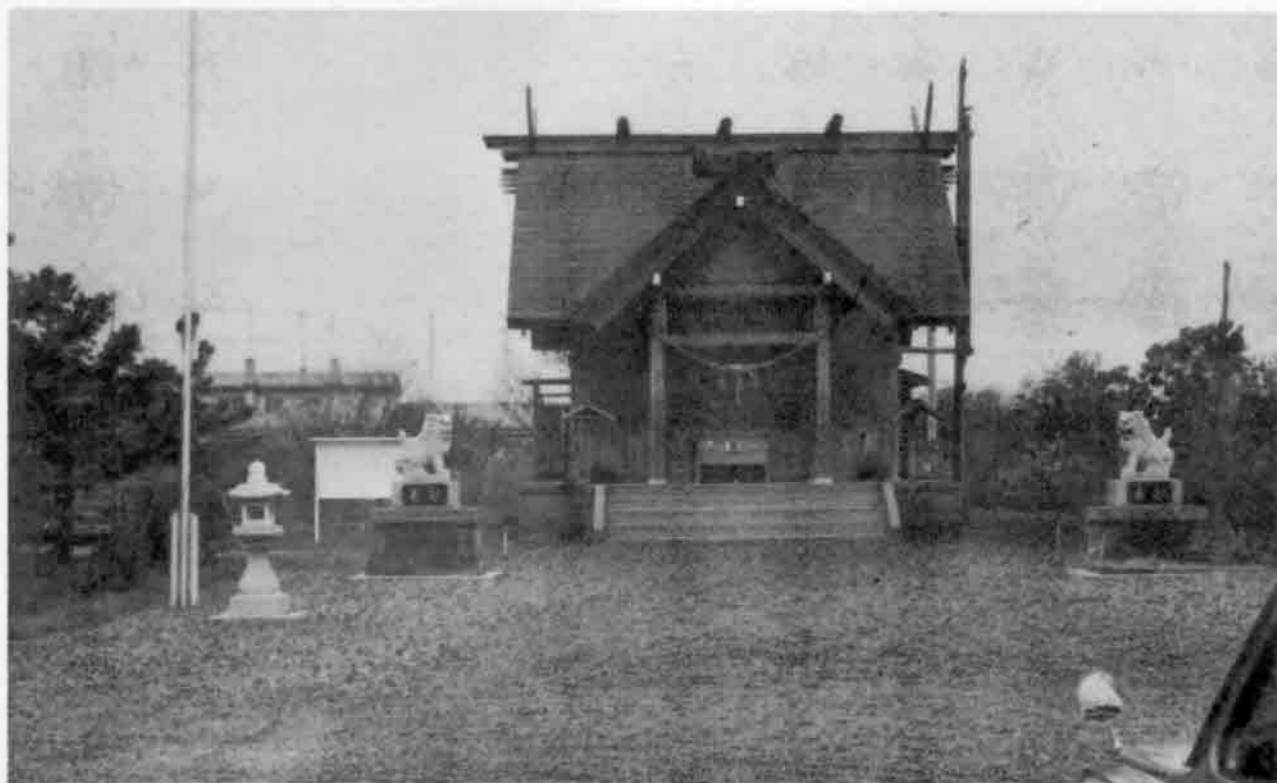


佐藤傳作奉納（小嶋規矩夫、筆）（下川写真館写す）



中央左が市橋町長、中央右が小嶋規矩夫氏（山田氏系譜）

（下川写真館写す）



(亀畑 写す) 昭和50年10月



恵比順神社

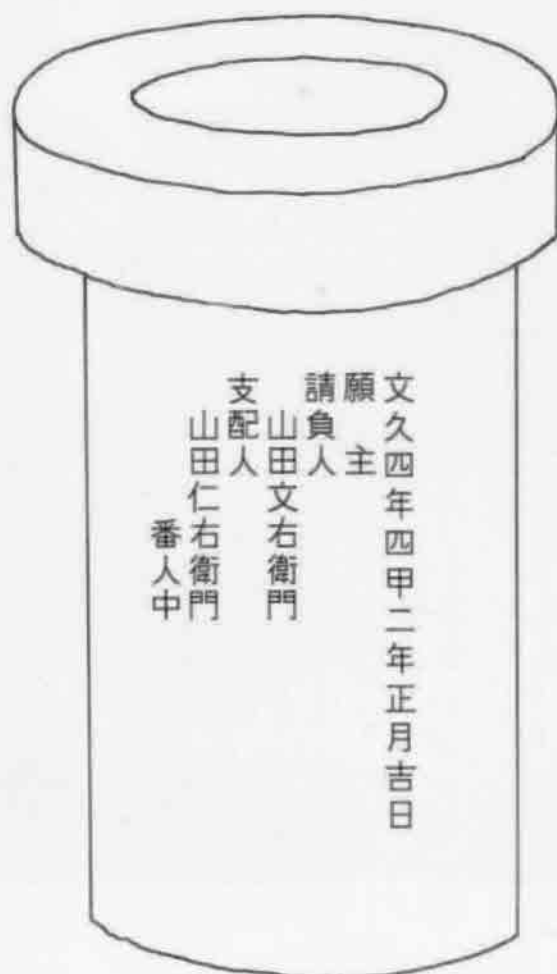
竜神社（全真守社）が文政年間に十代文右衛門によって建てられ、後に現在のところに移され、名も恵比順神社と変わった。高さ1, cmの左の石とうろくに文久四甲二年・願主請負人山田文右衛門、右の石とうろく(写真には見えない)には支配人山田仁右衛門通詞喜兵衛帳役、和兵衛とほってある。

(亀畑写す) 昭50(1976) 10. 27

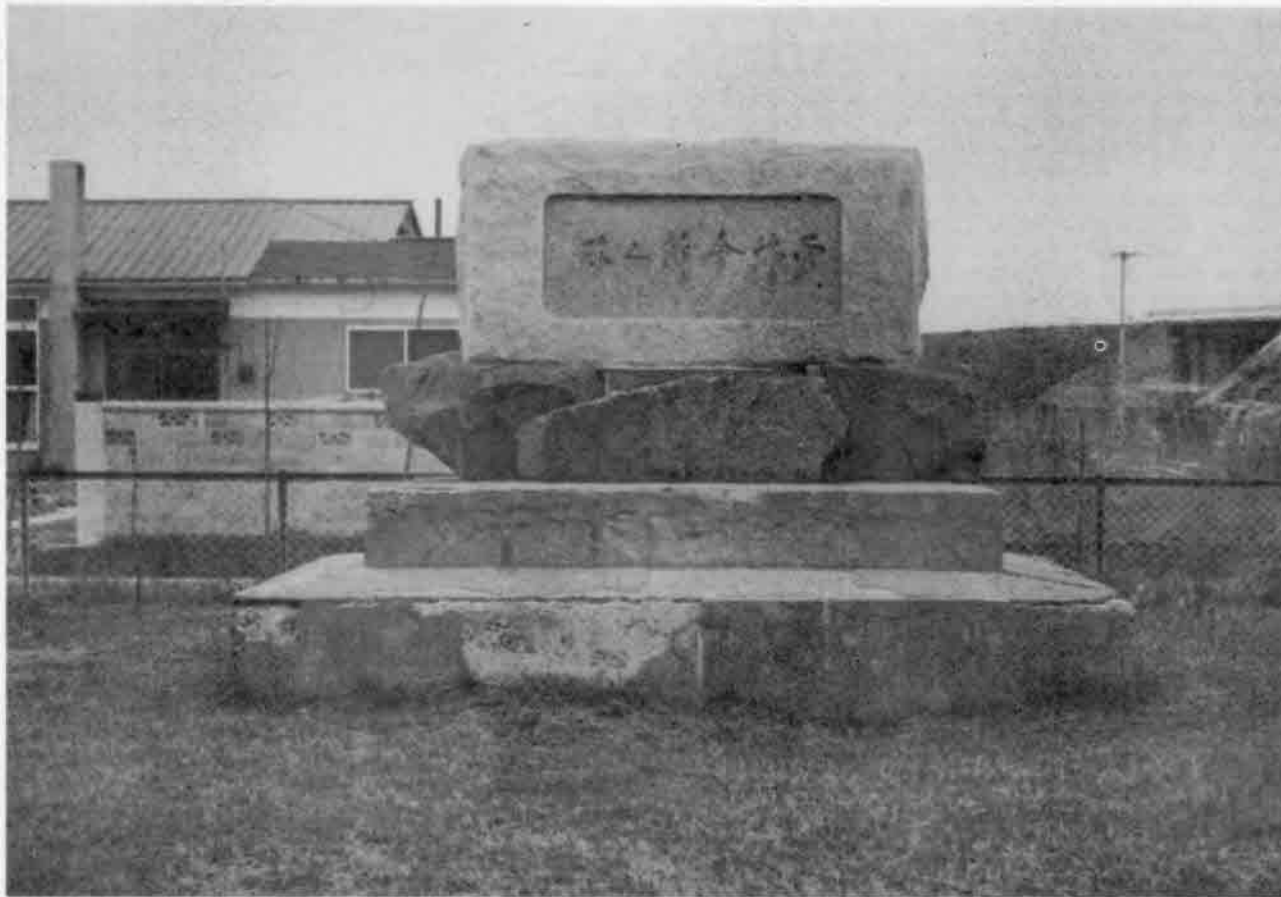


十代文右衛門寄進の方位を示した手水鉢、北海道には、ここに1つしかないと云われていたが、昭和54年に、ロバート・フラーシエム氏（福井大学）が、釧路の山田村で二つ目を発見した。

（亀畑 写す）昭和50年10月



手水鉢を横から見た図



勇払会所跡（アイヌとの商品取引所）

山田家は、ここで生産物の1部の取引をした。

（亀畑 写す）昭和50年10月



苫小牧市指定文化財

（種類）記念物（史蹟）

（名称）勇払会所の跡

（由来）天正十七年松前藩は蝦夷地を豊多

の場所を区分し、家臣の知行としてアイヌとの交易

を許した。勇払の地は一つ、東蝦夷地屈指

の場所として名高かった。寛政十一年幕府

の直轄となり、運上屋を会所と改め、勘定士を

置いて取締りの任に当り、通行屋の設置、官船

寄附地の指定を始り、国防上烽火台を築き

早島早船早走りの制を施されるなど交通上

警備上の要地となった。文政四年松前藩は運

付され会所は勘定所と併置されたが、安政三年

に至り再び幕府の直轄となり幕吏詰泊士の

往來も繁しく、駅通通行屋も充実し賑いを極

めた。しかし、明治二年、蝦夷地を北海道と改め

開拓使の出張所がおかれたが、同六年苫小牧市

街に移され勇払中心の時代は終った。

勇払会所の存在は東蝦夷地の政治、交通、国

防、商漁業上の要地として、道史上から重要な

ものがあり、市にとり貴重な記念の地であ

る。昭和三十一年三月十日、苫小牧市文化財

保護条例によって市文化財記念物（史蹟）

に指定され、同三十三年石井光次郎氏筆

による記念碑が建立されている。

昭和三十一年三月十日建立

苫小牧市教育委員会



恵比順神社の近くに勇払幕史・高橋次太夫と山田家と交友のあった
悲劇の八王子同心第二陣隊長、河西祐助の建てた波切不動堂があっ
た（亀畑写す）

昭50.10.29

北海道指定文化財 史跡「開拓使三角測量勇払基点」

北海道開拓使が洋式による精密な北海道地図を作成するため明治6年3月雇米人ゼームス・アル・ワッソン氏
を測量長に命じ4月三角測量術による測量を開始したが7月石狩の基点選定に失敗し改めて勇払に
舘川の間に基線を描きその両端の基点に標石を建てて勇払基線を定め同年7月米人助手モレル・エステ
ーが代って測量を行ない勇払の北北緯42度37'24" 東経141度45'の地点を基点として東へ直線に測り
3里28町13間07324 尺14860メートルと精測した
その後約4年間の歳月をついやしてようやく沿岸測量を完了し明治10年英文の「北海道三角測量報文」が開拓
使の手によって出版された
現在 高さ90センチメートル 一辺17センチメートル 四方の盛土上の中央、銅棒指標のついた一辺30センチメートル
四方の花崗岩柱が埋設されているが、舘川基点は現在未発見で不明であるので、この勇払基点はわが国における
最初の洋式三角測量の唯一のものとして、道史上はもちろんわが国測量史上貴重な文化財、史跡とされている

注意事項 昭和42年3月17日指定

- 1 みなりに敷地内に入り込まないこと
- 1 盛土の上にあがり土砂をとらないこと
- 1 植物をいたわりとらぬこと

**北海道教育委員会
苫小牧市教育委員会**

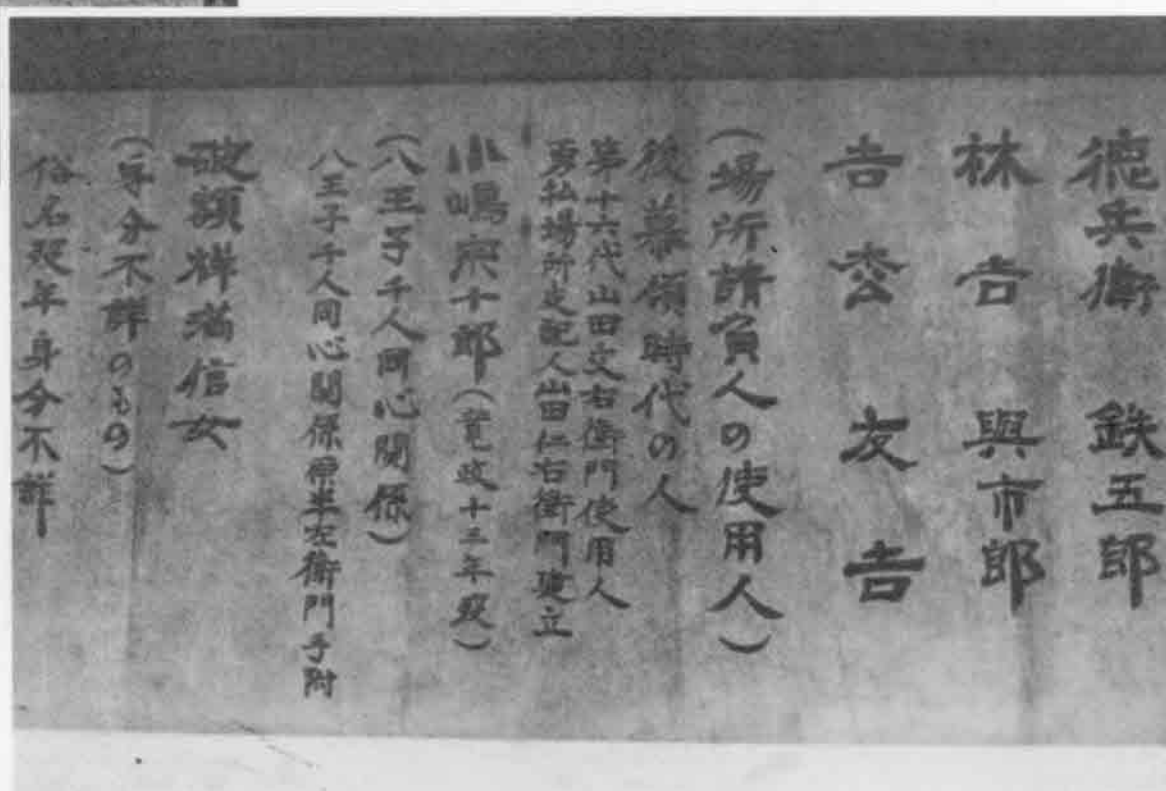
勇払会所のすぐ近くに三角測量勇払基点があった。（亀畑写す）



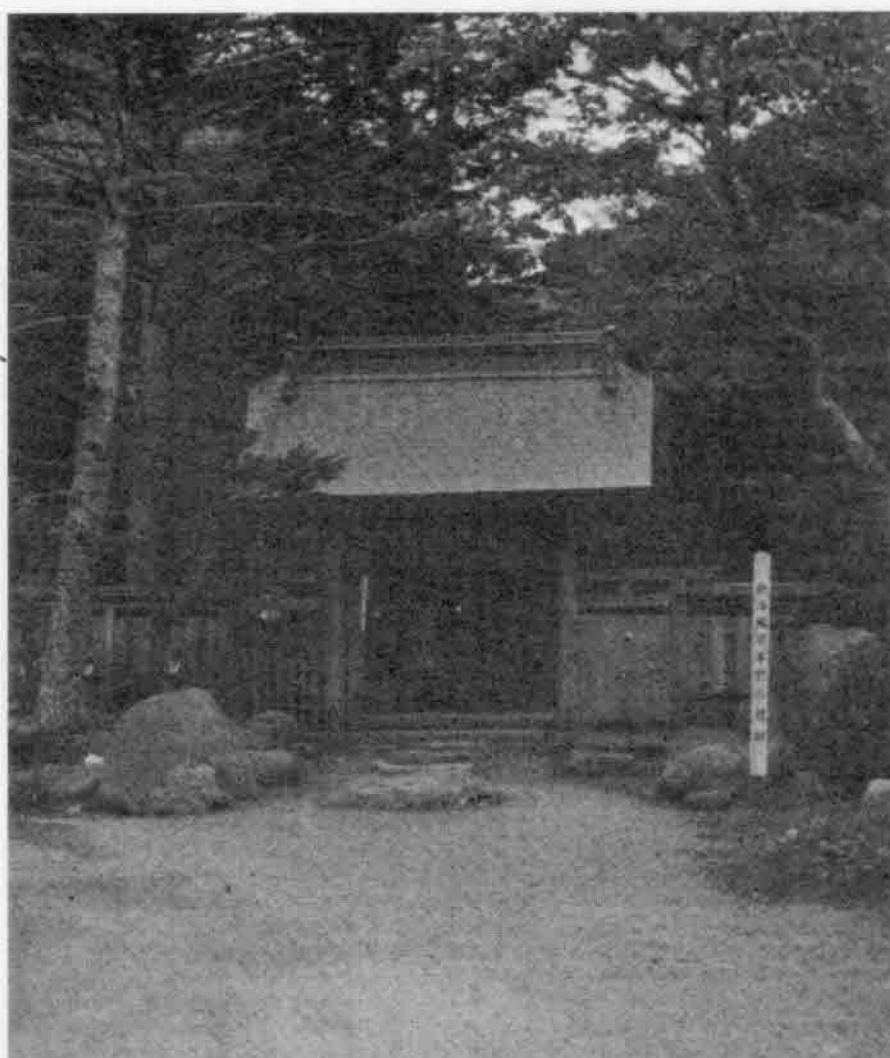
王子製紙敷地内にある山田家ゆかりの人々の墓
(亀畑 写す) 昭和50年10月



山田家の番人(使用人)の墓
(亀畑 写す)

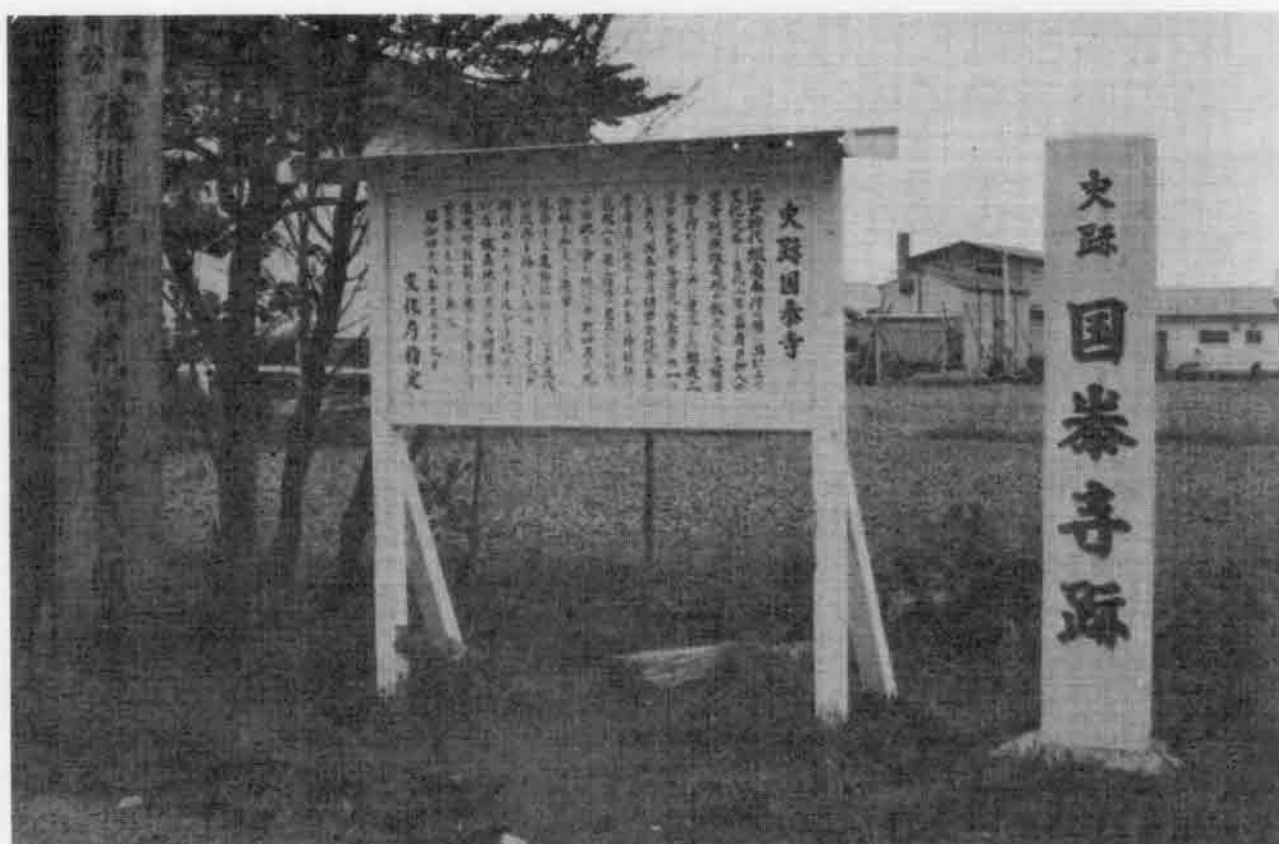


右側の6名の名が、上の墓石にほってある。



国 泰 寺 正 門

十代 文右衛門は、天保年間に、国泰寺の建て直しを行っている。
(亀畑 写す) 昭和53年10月



(亀畑 写す) 昭和53年10月



国泰寺の佛牙舍利塔と石燈籠

これらは十代文右衛門が千葉の桃子から手船で運んだものである。
石燈籠には「不夜燈」の文字がほられている (亀畑写す) 昭和50年10月



佛	牙	舍	利
天保十三年壬寅年建塔	奉讀誦大船若經六百卷	奉讀誦大乘妙典壹千部	奉讀誦楞嚴神咒壹萬卷
利	台	差	住當十六世淵香國

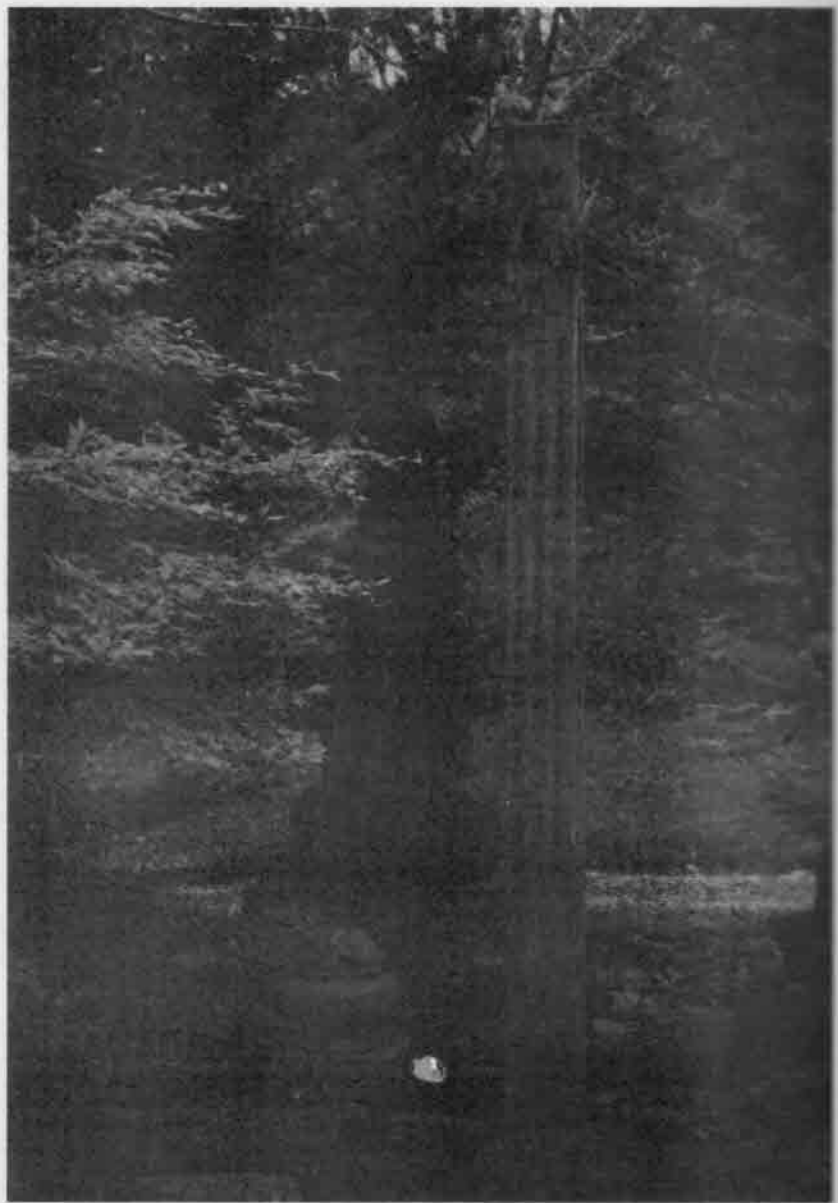
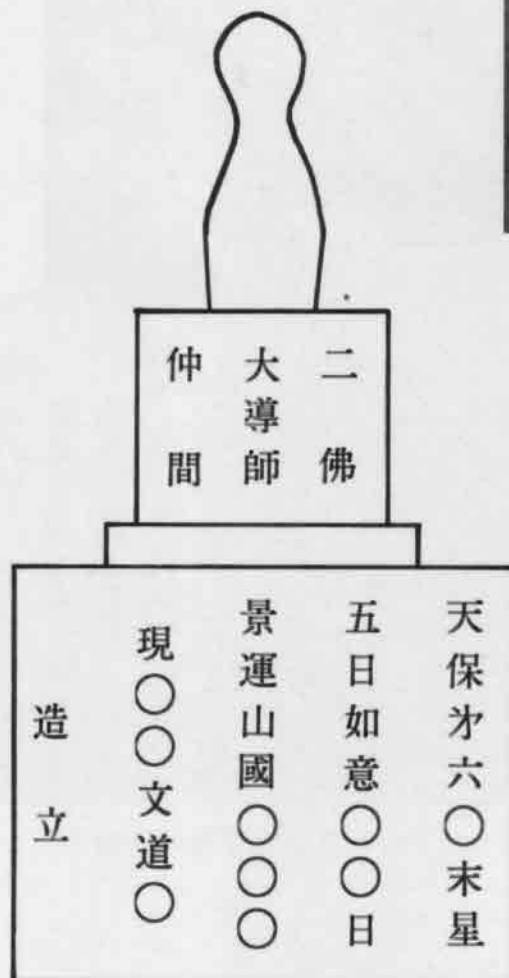
近江屋惣兵衛	山田屋順吉	藤野喜兵衛	願主	山田屋文右衛門	助
		藤屋善吉	植田屋甚藏	大関屋文太郎	米屋勝三郎
		館村屋順兵衛			福嶋屋嘉七

佛牙舍利塔には、上記のようにしるされている。

佛牙舍利塔の前で

遠藤文太郎氏と国泰寺真壁智空御住職

地尊像



国泰寺にある、山田家の船頭達によって建立された地尊像。なお船頭名については24頁を参照

・なお、この像には、次のように記してある。

地藏尊

当山五世文道

玄宗和尚

・○印は、字が薄いため、解読できない。



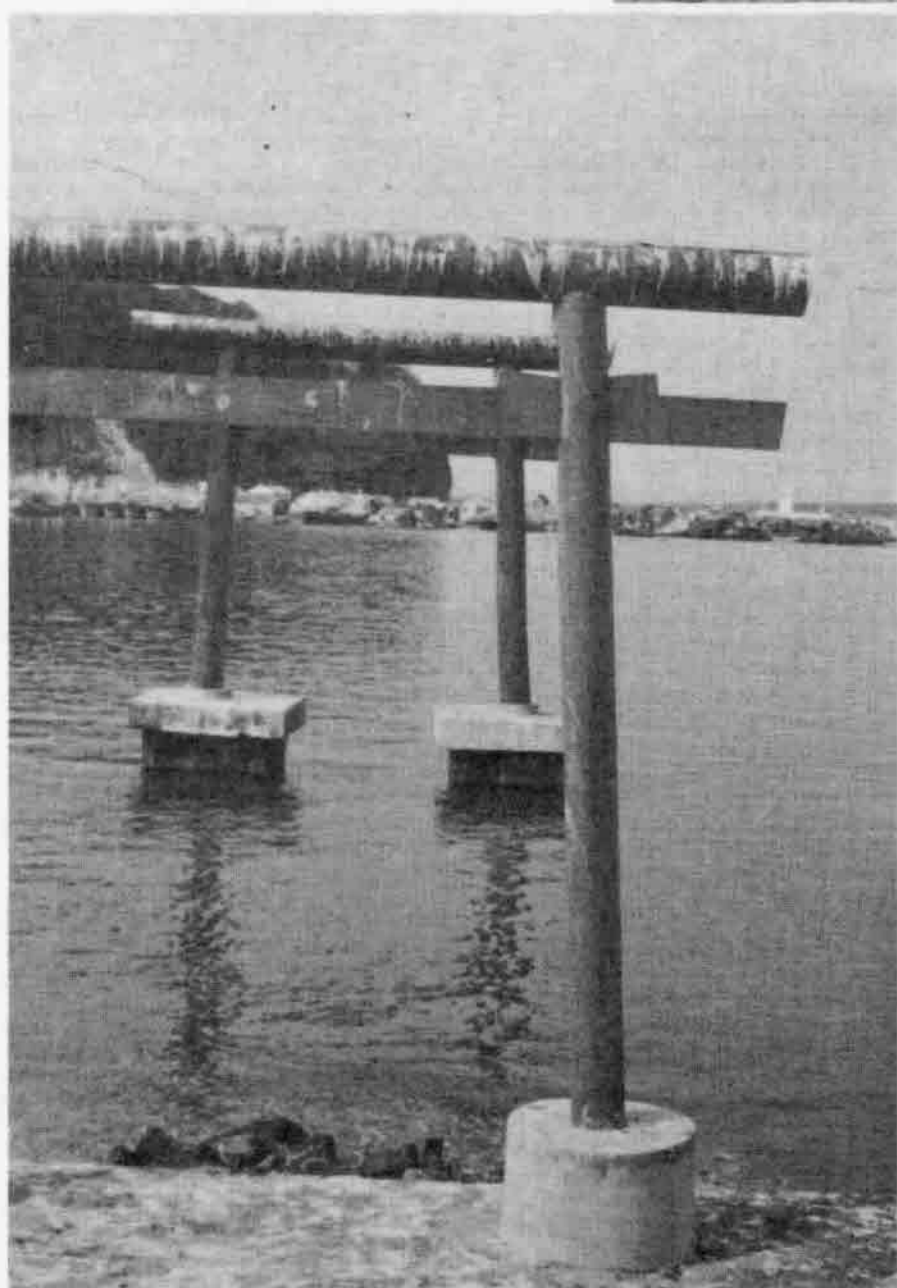
蛸島弁天神社は、十代山田文右衛門によって建立されたが、現在は写真のように建て直された。（亀畑 写す）昭和50年10月



(右) 真壁御住職 (国泰寺)

(左) 鈴木辰雄氏

昭和53年10月



弁天神社から、海岸をみる。



弁天神社が建て直される以前に神社におさめられていた山田家奉納の弁財天（木彫に極彩色を施した高さ約8寸の坐像）現在は国泰寺前の厚岸博物館におさめられてある。（亀畑写す）

帳 入	名 称
牡蛎島弁天	神 社 御 戸
船頭	豊福丸水主捨人乗
願主 田村権之助	山田文右衛門手船
○嘉永五壬子牛	アツケシ御場所請負人
千蘭月二十一吉辰	前奥島松前御城下
	寶 辨財尊天御戸帳

建て直す以前の弁天神社には、山田屋の船頭、田村権之助が奉納の、金欄の幕があり、それには、上記のように記してある。これがどこにあるのかをさがしたところ。この幕は国泰寺横の厚床郷土博物館におさめられていた。



厚岸博物館

(亀 畑 写 す)



函館信金をまっすぐに下っていくと静かな湾の港に出る。山田家の屋敷と直結したこの港から、山田家は海産物を本州および清国に移輸出し、幕府の財源になるほどのばく大な利益をあげていた。現在は、写真のような一層整備された良港になっている。（亀畑写す）

九代 山田文右衛門喜長（寛政十年～天保十三年～一七九八～一八四二年）

幼名 房吉

隠居後は覺藏を名のる。

法名 釋敬寿 於江戸宅病死貴骨当所專念寺江葬 天保十三壬寅年（一八四二年）

妻 佐和 江戸近江屋吉兵衛女

九代喜長についても道および北大の資料では十五代となっているが、これは誤りである。喜長は山田家としては短命の四十四才で没しているが、存命中ついに一度も自分の請負場所の北海道を見ることなく江戸でくらし、場所は山田寿兵衛にまかせていた。喜長の時代の請負の書類に次のものがある（北海道大学北方資料室本。「苫小牧市史」上五五六頁より引用）

ユウフツ

天保二卯年ヨリ酉年迄七カ年

一金貳百拾兩

一 秋味之儀ハ貳千七百石以上出増積取節ハ八百石ニ付金七兩ツツ上納可致、但切廻ニ相成積取節ハ、前文百石ニ付、拾七兩割合ヲ以、半金上納可致

一金五兩 貳分金

宿 「太

証人 ㊤

宮川

また「福島屋文書」の「東西蝦夷地場所、運上金揚り高並夷人別控」によれば

ユウフツ

蝦夷家二百二十四軒

人別

男 五百五十一人

女 五百十三人

千六拾四人

運上金 二百五十兩

金五兩 二分積金

秋味三千五百石以上出増積取之節ハ、百石ニ付、金拾七兩上納、切廻ニ相成候節ハ、半金上納可仕候。

右三千五百石之内七百石、天保十四亥年正日御宥免被仰付候

請負人 山田文右衛門

証人 栖原仲藏

宿 京屋平八

名主 宮川半右衛門

天保九戌年より弘化元辰年迄（注一八三六～一八四四）

十代 山田文右衛門清富

文政三年八月十日～明治十六年九月十二日（一八二〇～一八八〇年）

法名 釋貞觀

妻 直福 山西村茂右衛門四女

同 重治郎
同 七右エ門
同 長之助

鳥居をすぎると左右に石燈籠があり社殿に出る。社殿は稲荷神社の象徴として朱塗である。小野寺宮司の談によると稲荷社造りとしては本道でも代表的なもので名のある宮大工の手に、そして絵馬は狩野一派の筆になったものという。拝殿には、次のものが掲げられている（門別町史 三七三―三七四頁）。

櫓の大額「稲荷神社」

大絵馬

神后竜神より宝玉を受くる（絵馬）

願主、サル御場請負人

山 田 文 右 衛 門

山 田 寿 兵 衛

支 配 人

（寄進年月日不詳） 番 人 中

「安宅の関」（絵馬）

慶応元乙丑年七月

松 村 精 之 助

伊 久 間 市 之 助

帆船豊通丸（絵馬）

山 田 文 右 衛 門 手 船

船 頭

慶応（字が消失） 正月吉日

額

鉾先二本を飾った額

申七月

サル番人 森 金 作

鉄製槍先（かぶら型）二本

享和三癸亥年

宝 前 八月十七日

比企市郎右エ門藤原可満

原 新介平胤暉

（注、この二人こそ悲劇の八王子同心の頭領である）

大絵馬

牛若丸・弁慶・五条橋（絵馬）

寄進者・寄進年月日不詳であるが文右衛門の寄進によるものとされている。

帆船、桂丸（絵馬）

帆船、桂丸（絵馬）

山田屋手船

船頭順次郎 船中

「大黒様」 絵馬

願主

大冥屋吉兵衛

山田屋新義

明治二己年九月十六日

丁度この頃、近江商人藤野善兵衛は根室一円を請負っていた。彼と山田屋と国泰寺の御住職とは、年に一度の祭りごとの折には国泰寺で相まみえたことであろう。このことを示すものとして、国泰寺佛牙舍利塔建造の際、両名が願主として名をつらねており、材料のみかげ石は山田屋の手船で千葉の銚子より運搬したものである。この塔の台石には次のように記されている。

補 近江屋 惣兵衛

山田屋 順吉

願主 藤野 善兵衛

藤屋 善吉

館村 順兵衛

植田屋 甚蔵

大関屋 文太郎（山田屋支配人）

山田屋文右衛門

補 米屋勝三郎

福嶋屋 喜七

また天保六年に山田屋の船頭達の手によって文道造立名の地藏尊像を造り運んでいる。「その台にたしか山田家ゆかりの人々の名があるはず」という国泰寺十三世大元智空師（真壁御住職）の言葉をたよりに、苔むした二等身ほどの地藏尊像をくまなく掃除したところ、台石に次のように船頭名がしるされていた。

山田屋文右衛門手船

順吉丸 仁三郎

同船方中

榮順丸 長右衛門

同船方中

順通丸 徳右衛門

同船方中

順真丸 勇七

同船方中

順悦丸 鉄五郎

同船方中

幸順丸 長吉

同船方中

願力丸 文治郎

同船方中

右

（なお釧路叢書「日鑑記」二六三頁にある山田屋喜右衛門は寿兵衛か文石衛門の誤りであろう。）

注

国泰寺の歴代住職は次の通り。

開山、文翁 二世、萬金 三世、靈雲 四世、仙叟 五世、文道
六世、香国 七世、直州 八世、香山 九世、海巖 九世から幕末
に入り、混乱のためしばらく後任がなく、明治二十二年、京都南禅寺の所管
に移されてはじめて十代がきまる 十世、大義山東州（明治二十九年） 十
一世、橘悟堂（明治三十五年） 十二世、小原天門 十三世、真壁智空（現
住職）

すると共に、研究の一日も早い完成を願ってやまない。

私がこの論文をまとめるにあたって、表題を「場所請負人・山田文右衛門」としたかったが、これは我が祖先を研究対象としてくれたフラーシエム夫婦のきたるべき日のために敬意を表して残しておきたいと考え、「我が祖・山田文右衛門履歴」とした。

最後になったが、この論文をまとめるにあたって、陰の力を提供して下さった多くのかたがいた。その皆さんの氏名をここに記すことによって、ささやかな感謝の意を表することにした。

門別

佐藤 伝作氏（門別稻荷神社）

菅野 厚氏（門別町役場）

中村 哲雄氏（門別町役場）

梶川久太郎氏（門別町漁業組合長・理事）

小島規矩夫氏（山田屋寿兵衛系譜）

勇 弘

片石 昌伸氏（恵比須神社宮司）

苫小牧

楠野 四夫氏（苫小牧図書館長）

函館

木村 文彦氏（みなと薬局）

厚岸

真壁 住職（国泰寺一五世御住職・大元智空）

大沼 幸雄氏（厚岸公民館長）

鈴木 辰雄氏（漁業・蠣島弁天社管理責任者）

網走

和田 英昭氏（網走市立郷土博物館学芸員）

浦河

小西 力氏（浦河町役場）

留萌

運上 光彦氏（花田家番屋館長）

参考文献

十代山田文右衛門清富著「山田氏系譜」亀畑義彦蔵

山田実丸「山田氏系譜」北大資料室蔵

山田実丸「山田文左衛門履歴」道および北大資料室蔵

菊地新一「勇弘場所の発達と請負人山田文右衛門」『経済論集』第十一号 大東文化大学経済学会

函館区編「山田文右衛門事蹟」北海道庁資料室・札幌商科大学図書館蔵

「留萌市史」

「東亜蝦夷運上調全」

「苫小牧市史」上下

松浦武四郎「竹四郎回浦日記」安政四年

福島屋文書「東西蝦夷地場所運上金揚高並夷人別控」

「千歳市史」

松浦武四郎「西蝦夷日記」

「門別町史」

「北海道名所旧蹟」

「野作東部日誌」

佐藤伝作奉納・小島規矩夫氏筆「門別稻荷神社の概歴」

松浦武四郎「初航蝦夷日記」

「厚岸町史」

「厚岸の史実」

国泰寺「日鑑記」文化元年（一八〇四年）から文久三年までの初代文翁から

九世晦巖にいたる六〇年間の日誌で三十六冊からなる。

「日鑑記」釧路叢書

「石狩町史」

「松前町史」

「塩野適齊」桑都日記

「諸場所過去帳」厚岸国泰寺

「御寺御建立以前之過去帳」厚岸国泰寺

資料1 (石狩町誌三卷三四〇—三四五頁)

石狩秋鮭引揚ヶ処並歩役取立方調書

二割役

小樽出稼

一、字ヒトエ

山田文右衛門

一、字ホンヒトエ

山田文右衛門

一、字タンネヤウシ

山田文右衛門

一、字トママタイ

山田文右衛門

一、字下向

山田文右衛門

一、字下向

山田文右衛門

一、字ツイシカリ前浜

山田文右衛門

一、字上向

山田文右衛門

午八月

資料2 (安政三丙辰九月) 石狩町誌三卷二六九—三七三頁

注 印は山田屋の屋号

一、和人網引揚

文 蔵

甚四郎

大網惣統

政右衛門

当辰年結立

ヨイチ番人 徳三郎

凡八百七十間

同 岩 松

シユツプ

ヨイチ夷人男女五十人

印大網惣統

ホリカモイ

栄三郎

小網二統

福 松

替網四統

万十郎

当辰年結立

藤 吉

藤十郎

二百六七十間迄
二百八九十間迄

雇人九人・元夷人船頭二人

印小網惣統

タカシマ夷人 二十人

サル・ユウフツ男女夷人三十人

元夷人と有之候所は都て石狩夷人に付

ワツカライ

幸五郎雇人六人・元夷人船頭二人

当辰年結立 サル・ユウフツ男女十九人

二百六十間

二百九十間

印小網惣統有之

テイネ

庄之助

小網一統

元夷人船頭一人・サルユウフツ男

女十一人

当辰年結立百六十間

印網なし

モシンレフ

小網一統

与市・元夷人船頭一人

当辰年結立百六十間

二印網なし

上トウヤウシ

小網二統

当辰年結立百八十間

二百間

二印網一統有之

ハンナクル

小網二統

凡百七十間

二印小網一統有之

ハシヤフ

ウライ網一ヶ所

ヒトエ

ホンヒトエ

トエビリ

小網三統

替網一統

当辰年結立百六十間より百九十間まで

二印小網七統有之扱方の儀はヒトエ同様の事

夷人網一統

ツイシカリ乙名ルヒヤンケ持右夷
網扱方ツイシカリ持なり

追網 大網人数持

小網一統当辰年結立百六十間

ウス夷人男十人

鉄五郎

雇人一人・元夷人男二人

ウス夷人男十人

六右衛門

元夷人船頭一人・ウス夷人男十人

弥之丈

元夷人二人ウス夷人男七人

ヒトエ三統方

万五郎

七之丈

雇人十人・元夷人男女六人

サル・ユウフツ同十六人

資料3 (これは文右衛門の樺太開拓を幕府が許可した書)

組頭 三田喜六

書面ノ東地、サルユウフツ請負人、山田文右衛門儀、北蝦夷地御直
場所内へ出稼人差出候ノ儀、昨年中願ヒ済ニ付、御趣意ノ趣厚ク相
心得、可成丈場、廣ク新漁場取り開キ度ク、就而者請負場所ノサ
ルユウフツ土人共ノ内、男女共御直場所へ年々通イ、稼為シ致ス。
尤元場所、差支無之様、操合セ且ツ撫育方等モ、厚ク手当可致
(資料の出所・「北蝦夷地御用留」18-19頁・北大資料室より)

資料4 漁場・昆布場略表 (安政五-六年・一八五八-一八五九)

樺太の部

地名	漁小屋・倉庫	種類
栄の渚	十一棟	鯨・鱒・鮭・昆布
中の泊	三棟	種類は、はっきりしない。
フシベ泊	五棟	
サツサツ	六棟	
ポンニシユマヤ	五棟	
シユマヤ	六棟	
濱中	三棟	鱒・鮭
ナエブツ川	七棟	
ナエブツ沼	五棟	種類は、はっきりしない。
アエ濱	七棟	
フシエンロケナエ		

(他に五所「西浦の漁場があったが倉庫その他詳しいことについては不明」)
(資料の出所・北海道庁資料。札幌商科大学「山田文右衛門事蹟」)

資料5 漁場昆布場略表（安政五—六年・一八五八—一八五九）

国郡	地名	種類
石狩	恵別太・石狩海岸	鮭
厚田	不詳	鯨
小樽	不詳	鯨
高島	不詳	鯨
沙流	字ウエンナイ・シノダエ・モノダエ・ヒラウトル・エバブ	昆布
厚岸	モンシエチ・トマタル濱・アエカブ岬・アエラシカブ岬・ヒリカラダ・ボンモシリ・シチルブ・モチルブ・パタラチルブ・ヒバセ川・他数十所・根室に接す	昆布
根室	ペトカツ・風連川（買入れ）フシユトウフト・アシリコタン（買入れ）ボシニヨコルベツ・トモシリウシ・志古丹	鱒、鮭および昆布

資料6 沙流郡昆布投石法施行年月調

年代	船数	石工・雇人	投石の数	昆布収獲高
初年・文久二年 一八六二	五艘			
二年目・文久三年 一八六三	五艘	石工 十二人 土工三十六人	長一尺五寸 一・二尺厚一 尺三・四寸 二万七千個	
三年目・元治元年 一八六四	五艘	同	同五万个	
四年目・慶応元年 一八六五	五艘	同	同五万个	三百石
五年目・慶応二年 一八六六	五艘	石工 二人 土工三十六人	同五万个	三百八十石
六年目・慶応三年 一八六七	七艘	石工 二人 土工三十六人	同七万个	五百六十石
七年目・明治元年 一八六七	七艘	土工のみを用 う	同七万个	七百石

資料5・6の出所…北海道庁資料室・札幌商科大学蔵「山田文右衛門事蹟」より

